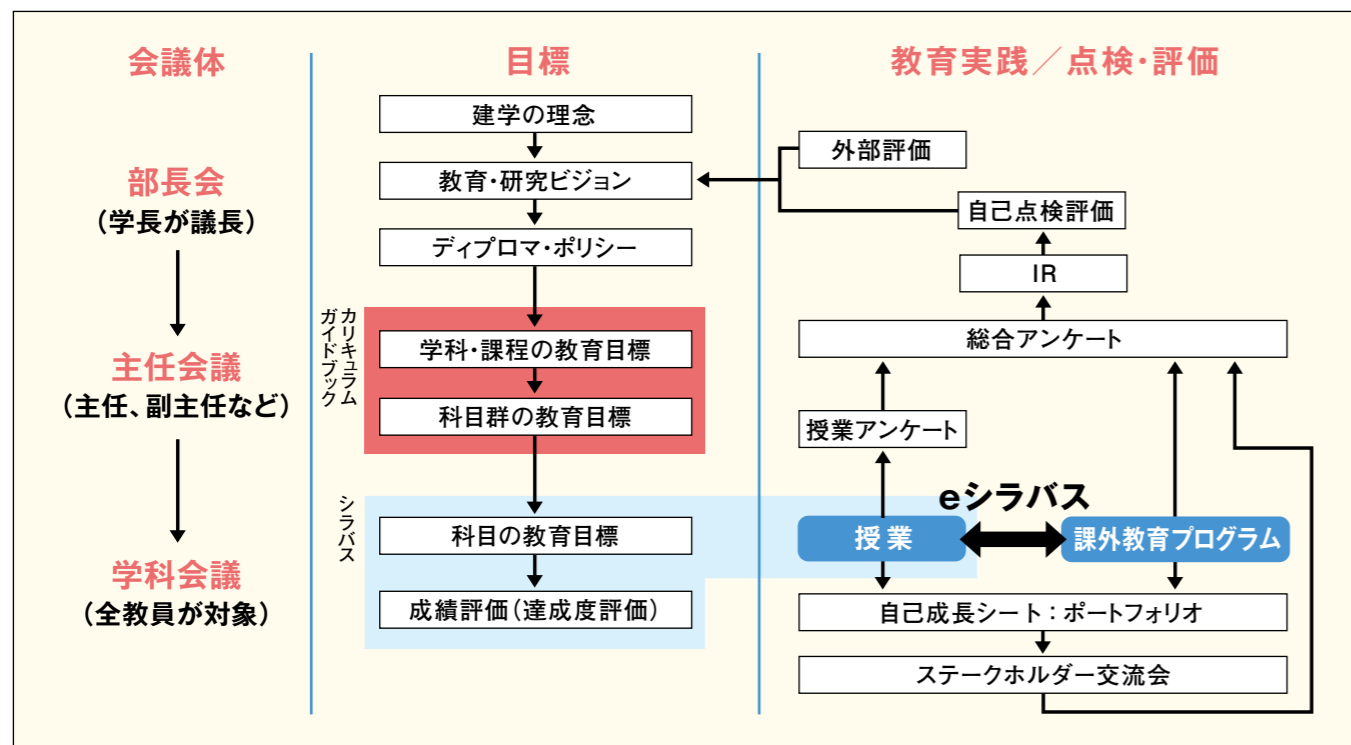




学生数/約6800人
 学部/工、情報フロンティア、建築、バイオ・化学
 大学院/工学、心理科学、イノベーションマネジメント
 ▶THE世界大学ランキング日本版2021/総合111-120位、同教育充実度23位、同教育成果27位

教学マネジメント推進体制図



PDCAを回す工夫

授業科目レベル	学位プログラムレベル	大学全体レベル
<p>▶ 社会の変化等により、科目に内容や課題の追加が必要になった際はリアルタイムで対応。追加の指摘は教員本人のほか、学科会議、学生など全構成員が行う</p>	<p>▶ 育成能力ごとに分けた科目群の教育目標と、学科・課程の教育目標を、主任会議で横並びに見て、DPを達成するうえで不足がないかを確認する</p>	<p>▶ IRがまとめた自己点検評価、学外有識者による外部評価を基に、部長会で教育・研究ビジョンを検討。例えば「DXにかじを切る」といった全学的な方針を打ち出す</p>

注目! 産学連携をさらに深化させる 社会課題解決型の「コーオプ教育」

DXによる意識改革で学内の組織活性化を図っている金沢工業大学は、学外の企業との連携でも関係の深化を進めて、取り組みを活性化させている。その一つが、2020年からスタートした「KITコーオプ教育プログラム」だ。

これは大学と企業がテーマを決め、学生が企業と雇用契約を結び、4か月から1年にわたり、企業の一員として「実社会のソリューション」を体験するもの。インターンシップでは企業の人に好かれようと、学生は職場での立ち居振る舞いを意識しがちだが、コーオプ教育は実際に仕事に従事するので、学生が大学で身に付けた力が試される。企業の側も、学生が大学で学ぶ最新技術を業務に取り入れることができ、DXの推進などに役立っているという。学生・企業・大学の三者が共にメリットを享受できる新たな産学連携のあり方だと言えよう。

KITコーオプ教育プログラムのイメージ

大学指導教員 ↔ 学生 ↔ 企業実務家教員

プログラムの共同提供: テーマ設定, 学生の就業状況確認, 協定書締結

産学連携で社会課題の真の解決に取り組む

- 未来社会Society5.0で活躍する人材を社会へ輩出
- 社会という実フィールドで、産学連携にて課題解決に取り組む

DXによる意識改革で組織の改善意欲を活性化

CASE STUDY

金沢工業大学 (KIT)

さまざまな教育改革に加えて、質保証システムを全学で回している金沢工業大学。DXによる教学マネジメントの進展について話を聞いた。



学長 大澤 敏
 おおさわとし●1991年東京理科大学大学院理学研究科博士課程(化学)修了。マサチューセッツ大学博士研究員、山口東京理科大学助手等を経て、1996年金沢工業大学講師就任。バイオ・化学部学部長、教務部長等を経て、2016年より現職。

制度改革と質保証の両輪で教育を改善

本学では、「自ら考え行動する技術者の育成」を目標に、社会で活躍するために必要な力を学生が卒業までに身に付ける実践的な教育に取り組んでいます。

インプットするだけの教育や、所属する学部・学科の中だけ、同世代だけの学びでは、そうした力は身に付きません。社会が求めているのは、学んだことを生かして課題解決する力であり、世代・分野・文化を超えて協働する力だからです。そこで本学は、社会実装を通して問題発見・解決能力を育成する「プロジェクトデザイン教育」や、学部・学科横断で教育研究を行う「クラスター研究室」学生と社会人が共に学ぶ「社会人共学者」などの改革に取り組んできました。

こうした教育の質保証については、全学的な教学マネジメントシステムを構築し、組織的にその推進を図っています (左ページ図参照)。

教育の方針は私が議長を務める部長会で検討し、その結果を主任会議で各学科・課程の目標や運営に反映、そして学科会議で全教員への情報共有を図っています。

一方、学生の学修状況や成績評価などの教育成果に関する情報は、IRで統合・管理し、そのデータをを用いて全体分析や個人分析、要因分析を行っています。その結果を全学の教育改善に活用するだけでなく、個人分析データは学生一人ひとりの修学状況の把握や個別指導にも生かしています。

このように本学は、新たな取り組みへの挑戦と、全学システムによる質保証の両輪で、教育の改善・向上を推進しているのです。

DXによりシラバスの内容が深化

現在は、DXによる教育の付加価値向上に力を入れています。その一例が、eシラバスです。

これは、科目ごとの学修内容や授業の運営方法、学修課題を記載したシラバスを、ネットワーク上

で確認できるようにしたものです。本学ではそこに、授業の要点をまとめた動画を掲載したり、レポート提出システムや自己点検・ポートフォリオへのリンクを貼ったりしていることで、学生は学修のポータルサイトとして活用しています。

さらに、その週の授業内容が他の学修や社会とどうつながっているのかを示すため、関連する課外教育プログラムや授業科目、知識・技術の応用例やその最新ニュースなども記載しています。これらは随時追記できるので、常に最新情報を確認できます。情報の更新は科目の担当教員が行いますが、学生や他の教員からも、「この課外活動の中で役立つ」といった情報や関係している」といった情報が寄せられます。つまり、みんなの協力でシラバスの内容が日々深まっているのです。こうなるともはや、「授業は担当教員の聖域」という意識はなくなりつつあります。

DXについては私は、個々のツールの利便性の向上よりも、意識改革がもたらす組織の活性化に意義があると考えています。「もつと教育をよくしたい」と願う教職員や学生の思いを結集し、今後も主体的な教育の改善・向上を進めていきます。

取材・文/ 見山雄介